

平成24年度 広島大学大学院文学研究科  
博士課程前期（第二次）入学試験  
答案作成上の注意

専門分野	倫理学
------	-----

1. 試験に関する注意

- ① 試験開始後、直ちに下記の問題枚数等を確認してください。

問題枚数	4枚
解答用紙	3枚
下書用紙	1枚

- ② 受験番号等は、すべての解答用紙の所定の欄に記入してください。

2. 解答記入に関する注意

解答はすべて解答用紙に記入してください。

平成24年度 広島大学大学院文学研究科  
博士課程前期(第二次)入学試験問題

専門分野	倫理学
------	-----

(4枚中の1枚目)

I (英語問題) 次の文章を読んで後の問に答えよ。

How, in fact, are we to frame our moral calculus? How are we to estimate the tendency of any action on happiness or unhappiness? Since we have no divine faculty to pronounce one kind of happiness to be better than another, let us assume all to be equal. In the same way, let us assume that...each man is to count for one, and no man for two. Unless our units are assumed to be equal, we obviously cannot count to any purpose. But, however convenient the assumption, we may ask how ① it can be justified on empirical principles, and whether it does not lead us to practical difficulties? Why should the happiness of a Goethe or a Shakespeare be considered as of equal value with the happiness of a pickpocket? If all men's happiness is to be of equal value, does it not follow that we must accept the standard of the lowest...? One man prefers art to gin\*<sup>1</sup>; a thousand prefer gin to art. Why is the intellectual to be preferred to the sensual gratification? Because, it has been said, those who can appreciate both generally or always prefer the intellectual. But may that not imply merely that the power of gratifying the palate\*<sup>2</sup> is lost as the power of gratifying the mental faculties increases? Can we obtain a sufficiently secure standpoint for asserting the value of the purest and what are generally called the highest pleasures? So long as we start simply from observation of the individual mind, and allow each testimony to be of equal value, there seems to be no sufficient escape from these difficulties. ② What is called morality becomes simply the judgment of the average mind as to the relative value of its pleasures. There must always be a tendency in thinkers of this class to regard the heroic few as fools, and men of lofty\*<sup>3</sup> moral aspirations as mere dreamers.

注

\*1 gin : ジン (蒸留酒の一種)

\*2 palate : 味覚

\*3 lofty : 高尚な

問 1 上の文章はある思想的立場の批判を意図して書かれている。その立場は一般に何と呼ばれているか、答えよ。

問 2 下線部①が何を意味しているかを、できる限り具体的に答えよ。

問 3 下線部②を和訳せよ(a)。また、なぜそう言っているのかを、文中に書かれていることを参考にしつつ説明せよ(b)。

平成24年度 広島大学大学院文学研究科  
博士課程前期(第二次)入学試験問題

専門分野

倫理学

(4枚中の2枚目)

Ⅱ (ドイツ語問題) 次の文章をよく読んで後の問に答えよ。

Das Übel ist das Gegenteil\*<sup>1</sup> des Wohlbefindens\*<sup>2</sup>, das Böse aber das Gegenteil des Wohlverhaltens\*<sup>3</sup>. Das Böse entspringt aus der Freiheit und kommt also gänzlich von unserem Betragen\*<sup>4</sup> her, das Übel aber auch von der Natur. In Ansehung alles Übels in der Welt soll der Mensch eine gesetzte\*<sup>5</sup>, gleichmütige\*<sup>6</sup> und standhafte\*<sup>7</sup> Seele beweisen, aber in Ansehung des Bösen ist es anders bewandt, da geht es nicht an, daß der Mensch darin eine gesetzte, gleichmütige Seele blicken lasse, denn das erhöht noch mehr seine Bosheit\*<sup>8</sup>. Das ist ein Zustand einer ruchlosen\*<sup>9</sup> Seele und einer verruchten\*<sup>10</sup> Gemütsart, das Böse der Handlungen muß vielmehr mit dem Bewußtsein des Schmerzes\*<sup>11</sup> der Seele begleitet sein. Allein die gesetzte und fröhliche\*<sup>12</sup> Seele bei dem Übel und Unglücksfällen\*<sup>13</sup> erhöht den Wert des Menschen. Es ist wider die Würde des Menschen, der Gewalt der physischen\*<sup>14</sup> Übel unterzuliegen\*<sup>15</sup> und vom Spiel des zufälligen\*<sup>16</sup> Zustandes abzuhängen.

(Paul Menzer (Hrsg.), *Eine Vorlesung Kants über Ethik*. Pan Verlag Rolf Heise 1924)

- 注
- \*1 反対
  - \*2 健在
  - \*3 よい態度
  - \*4 振舞
  - \*5 落ち着いた
  - \*6 平静な
  - \*7 確固とした
  - \*8 悪意
  - \*9 卑劣な
  - \*10 邪悪な
  - \*11 苦痛
  - \*12 快活な
  - \*13 不幸な出来事
  - \*14 自然的な
  - \*15 屈服する
  - \*16 偶然的な

問1 “das Übel”と“das Böse”の相違点を述べ、それぞれの観点から福島原発事故について論じよ。

問2 “die Würde des Menschen”とはいかなるものか。自分の意見も加えて論じよ。

# 平成24年度 広島大学大学院文学研究科 博士課程前期(第二次)入学試験問題

専門分野

倫理学

(4枚中の3枚目)

Ⅲ (日本語問題) 次の文章は、『教育と倫理』(ナカニシヤ出版)からの抜粋である。よく読んで後の問に答えよ。

今日広く支持される メタ倫理 と 認知主義 に基づく 道德教育論 が 経験的・分析的方法 を拠り所として時代の要請に答えるという (実効的で外向き) の方向性を持つものに対して、この ホリズム論 はどこまでも「内観」を根拠として生の出来事の意味を (求道者的に内向き) に探究していく。しかも、前二者の道德論が、経験世界を基盤に置き、一貫して「区切り」(日常意識、言語、意味分節)によって方法論を構築していくのに対し、このホリズムの理論では「区切り」は一つのプロセスと考えられ、①「区切り以前 (主客未分)」→②「区切り (主客分化)」→③「区切りからの離脱 (主客合一)」という発達図式を配慮した教育がなされる。

とりわけ、「道德を身につける」という問題を考えるとき、両理論は根本的な差異を示すことになる。前者がその過程で、「知の組み替え (表象の操作)」に比重を置くのに対し、ホリズム論では、「表象的な知」のレベルだけでなく、「意志・感情・身体・モラルを含めた人間総体」そのものを直視し、全体的かつ形成的に見つめていくことになる。つまり、徳が持つ「善き人間に向けた (形成的な性質)」に着目し、徳を、主体の全人的変容によって自己形成的に獲得されるものと解釈するのである。

では実際に、ホリズム論では (存在の深み) とつながる (総合の知) をいかに実現していくのだろうか。(略)

「総合的な発達」の視点

このホリズム論では、思考と感情と意志は、現実的な生成運動として、相互に関連しつつ総合的に止揚されていく (しかも、それらの高進はモラルの向上に対応する)。順次、その過程を見てみよう。

まず、思考は、対象から来る印象を意識にのぼらすことで表象像を獲得し、それら諸表象を比較・分析することで概念を形成していく。こうした対象 (概念) 化作用を通じて物理的な因果関係が解き明かされるだけでなく、「私」という (個人的な人格意識) もまた明瞭となっていく。「自覚」という作用も、この個我の意識に始まる。さらに、ホリズム論では、先に見たように、思考活動はこのような (主客の分化) を枠組みとした 感覚的認識の次元を超えて、高次のモラル実現に不可欠な (主客合一) の視点で成り立つ「純粹思考体験」へと移行していく。

意志もまた、本能や利己心に起因する (後悔) や、欲望へと移行する (動機や願望) を超え、内なる精神から発する (希望) や究極的な (決意) へと高まっていく。そして、そうしたプロセスにおいて、意志は高次の思考作用 (Inspiration, Intuition) やモラルの実現と結びついていく (表象と意志の道德的・美的結合)。

感情は、ここでは、「低次の意志作用・思考作用」として両者の中間に位置づけられるが、高まりにおいて、究極的な感情作用である「献身」や「博愛」に至る。この極へ向けた感情作用の大きな役割は、われわれの思考や意志に働きかけ、「温かく生き生きとした力」を活性化させ、その上に刻むことにある。例えば、思考とのかかわりについていえば、感情から独立した「判断の客観内容」に正しさの (確信を与える) のはまさに (感情の働き) といえる。意志もまた、普通の生活ではその衝動や願望は (思い) にとどまることが多いが、感情や愛情から発した場合、(行為) にまで高まっていく。

さらに、この「総合的な発達」の把握には、各心的作用が持つ、「共感」と「反感」についての理解が必要となる。(思考 = 「反感作用」、意志 = 「共感作用」、感情 = 「共感と反感」)。

例えば、抽象的で分析的な思考がわれわれに与える影響を考えてみよう。疑わしいものを排除し、求めるものを選び分ける (懐疑と捨象の営み) を長時間つづけた場合、ひとはひどく疲れ消耗する。

平成24年度 広島大学大学院文学研究科  
博士課程前期(第二次)入学試験問題

専門分野

倫理学

(4枚中の4枚目)

これは、抽象的な認知活動が持つ「反感(破壊)作用」に由来する。また、逆に、〈生き生きと行為する〉状況を想像してみると、そこに「意志」が働いていることが分かる。意志は自己の内的な衝動(決意を含む)に根ざすため、それに基づく行為は「生き生きとしたもの」となっていく。反対に、意志に反して〈いやいや〉行うことがつづくと、「生きる力」は確実に弱まっていく。早期から〈認知〉を指標に評価されつづけた青年たちが無気力・無関心・無感動となるゆえんもここにある。

こうした見方をふまえるとき、今日のように幼少期から「区切り」の世界にさらされつづける教育(論理・分析を重視する早期の認知・ディベート教育など)は、懐疑・批判といった「反感作用」や他者を排斥視する「自意識」を心に根づかせ、最終的に目指される高次の非二元的な存在体験の妨げになることが理解される。「表象的な知」に偏った学習の在り方を発達に即して再構成し、思考・感情・意志を分断させることなく、「よりよき存在」という統合へ向けて協同的に変容させていくことが重要となる。

問1 下線 a のメタ倫理について、この立場は価値の問題に対してどのようなスタンスをとるのかを説明せよ。

問2 下線 b のホリズム論について、本論の内容をまとめたうえで、あなた自身の見解を述べよ。

問3 下線 c の「共感」と「反感」について、本論の主旨をふまえた上で、あなた自身の見解を述べよ。